

# 新旧ガイドブックを通じて見た河内の「名所」

浮田典良・伏見能成

## I. ガイドブックを取り上げる意義

- a) ツーリズム考察のためのデータ
- b) ツーリズムにとってのガイドブックの意義
- c) 本稿の対象地域

## II. 検討対象としたガイドブック

## III. ガイドブックで取り上げられた「名所」

## IV. ガイドブックにおける「名所」の記述内容

### I. ガイドブックを取り上げる意義

#### a) ツーリズム考察のためのデータ

ツーリズムとは、余暇時間のレクリエーション活動のうち、自己の日常生活圏の外へトリップすること、と定義できるであろうが、このツーリズムを研究対象として取り上げる場合、次の両面から考察することが可能かつ必要であろう。

- ①供給サイド(ホスト)、つまり観光地、観光対象の側
- ②利用者サイド(ゲスト)、つまりツーリストの側

それぞれどのようなデータが利用できるかということについてであるが、過去における

②利用者サイドのデータ、つまり人々の観光行動を明らかにできるようなデータとしては、例えば紀行文などが考えられる。しかし広い地域の客観的なデータは、現実問題として入手困難なので、それに代わるものとして、①供給サイドのデータを利用せざるを得ない。本稿で取り上げるガイドブックもその一つで

ある。

筆者らはかつて、旅館・ホテルなど宿泊施設に関するデータを用いて、ツーリズムの観点から見た日本各地の都市および観光地の性格と、その推移について考察した<sup>1)</sup>が、これも供給サイドのデータを利用し、それを通じて利用者サイド(ツーリスト)の行動・嗜好の変化を推察したのである。

#### b) ツーリズムにとってのガイドブックの意義

竹内啓一<sup>2)</sup>はかつて、外国語で書かれたガイドブックにおける日本像の検討に当たって「ツーリズム商品は、通常の商品や住宅のように、購入に先立って店頭で手にとって見たり、歩きまわって検討できるものではない。いわば情報だけにたよって、どこに行くか、そしてそこで何を見、何をすることが、真のツアーであるか、そこでどのような非日常性が得られるかを判断して購入しなければならない。ツーリズム商品のこのような特殊性から、ガイドブックなるものが、ツーリズム産業にとって大きな意味をもつことになる」と指摘し、ガイドブックの意義を高く評価している。

ほかに竹内啓一は、イタリアについてのガイドブックについて検討し<sup>3)4)</sup>、また中川浩一は、「ベデカ」や「ブルー・ガイド」「ミシュラン」などヨーロッパの代表的なガイドブックについて考証・考察を行っている<sup>5)</sup>。

近年、滝波章弘<sup>6)</sup>と西村孝彦<sup>7)</sup>は、フランスの代表的なガイドブックであるギド・ブルー

を用いて、フランスの「観光空間」について丹念に考察し、また加賀美雅弘は、20世紀初頭のオーストリア・ハンガリー帝国についての3冊のガイドブックを用いて、興味深い著作を公刊している<sup>8)</sup>。

本稿では、これら既往の業績に導かれて、19世紀初頭(享和元年=1801年)の『河内名所図会』以降、明治・大正・昭和戦前、さらに戦後、現在に至るまでの、合わせて18点のガイドブックを検討対象とし、それぞれに、訪れるに値するスポット(これを本稿では以下「名所」と呼ぶ)として、何を取り上げているか、また、どういうことを記載しているか、検討することにする。

### c) 本稿の対象地域

対象地域として取り上げるのは、現在大阪府の東部を占める旧河内国である。当初はその全域を取り上げようと考えて作業を進めたが、データの量があまりに多くなるので、その南部は割愛し、ほぼ旧北河内郡と旧中河内郡に属した地域、すなわち現在、枚方市、交野市、寝屋川市、四條畷市、大東市、門真市、守口市、東大阪市、八尾市、柏原市の10市に属する範囲に限ることにした。

## II. 検討対象としたガイドブック

我々が検討対象としたのは次の18点である。それぞれについて、著者名・書名・発行所・発行年や、河内についての記載の所載頁<sup>9)</sup>などを挙げ、さらに若干の補足説明を加えて行く。(1)秋里籬島『河内名所図会』、享和元年(1801年)11月刊：これは『都名所図会』をはじめ、大和・和泉・摂津・近江など合わせ11点の名所図会を書いた秋里籬島<sup>あきさとりのとう</sup>が書いたものである。1995年に原本が京都の臨川書店から復刻されているが、我々は1981年角川書店から出た『日本名所風俗図会』第11巻、263～400頁に収められているものを利用した。旧漢字、旧仮名づかいではあるが、原本の変体仮名を現在の

仮名になおして活字で印刷されている。

(2)田山花袋編『新撰名勝地誌』全12巻のうち、巻之一畿内、博文館、1915年7月刊行の第9版(初版は1910年3月)：文学者田山花袋が、1899年から1912年までの間(28歳～41歳)勤めていた博文館から、自分の編で出したもので、全12巻の第1巻が畿内を扱っており、298～344頁が河内である。

(3)鉄道旅行案内編纂所編『鉄道旅行案内』、1921年10月、149～151頁、187～191頁：大正から昭和初年にかけて何冊か出た『鉄道旅行案内』のうち、最も詳しいもの。

(4)鉄道省『日本案内記』全8巻のうち近畿篇下、博文館、1933年3月刊、63～85頁：鉄道省旅客課が、国史学の黒板勝美、地理学の山崎直方に調査・編纂に関する指導・助言を要請して、1929年から1936年までの間に全8巻に分けて刊行したもの。中川浩一<sup>9)</sup>が「戦前のガイドブック(旅行案内書)類の中で、詳細綿密最高のできばえを示した」「旅行案内書の決定版」と激賞している。近畿篇だけ上下2巻に分かれ、大阪府は下巻に記載されている。

(5)運輸省『日本案内記』全8巻のうち近畿篇下、日本交通公社、1950年3月刊、63～85頁：上記(4)の戦後の改訂版。内容的にかなり手が加わっている。

(6)『旅程と費用』日本交通公社、1952年8月刊、686～689頁：1919年からジャパン・ツーリスト・ビューローが刊行していた『旅程と費用概算』が、戦後『旅程と費用』と改題・復刊された、その初版。

この『旅程と費用』はその後1960年代後半まで版を重ね、1970年には『全国旅行案内』と改題されて、かなり分厚いものが刊行されているが、日本交通公社はその前から、地方別の『最新旅行案内』を出し始めていた。次の(7)はその初版である。

(7)最新旅行案内14『大阪・神戸』日本交通公社、1960年9月初版、46～63頁

(8) 郷土資料事典—県別シリーズ—29 『大阪府・観光と旅』人文社、1970年9月刊行の第3版(初版は1966年7月刊行)、43～55頁：その後も何回か改訂版が出ている人文社の府県別案内書。

(9) 大阪府通商観光課『道しるべ大阪』全3巻、大阪府通商観光課、南大阪編1971年3月、北大阪編1972年3月、大阪府中央部編1973年3月：地方自治体が出した異色のあるガイドブックの例。

(10) 交通公社の新日本ガイド17『大阪・神戸』日本交通公社、1980年1月刊行の改訂4版(初版は1976年7月)、129～167頁：交通公社の出版物らしく、あらゆる市町村に目配りした、たいへん詳しいガイドブック。

(11) JTBの新日本ガイド18『大阪・神戸』日本交通公社、1989年5月改訂新版、181～228頁：前掲(10)の改訂版。たいへん詳しいガイドブックであったが、現在は出ていない。

(12) 新全国歴史散歩シリーズ27、大阪府の歴史散歩編集委員会編『新版大阪府の歴史散歩』(下)、山川出版社、1990年12月1刷、3～152頁：歴史家の手による特色あるガイドブック。

(13) エアリアガイド30『大阪』昭文社、1997年1月3版12刷、170～197頁。

(14) 旅王国30『大阪』昭文社、1997年1月2版9刷、258～311頁。

(15) J-GUIDE20『大阪』山と溪谷社、1997年3月改訂5版、246～257頁。

(16) ニューガイド私の日本23『大阪・神戸』弘済出版社、1997年5月初版、82～89頁。

(17) NEWブルーガイドブックス15『大阪・神戸』実業之日本社、1998年2月第4改訂版、117～118頁、128～131頁：(13)～(17)の5点は、1998年春現在、通常の書店に並んでいる一般向けガイドブックである。

(18) 郷土資料事典—ふるさとの文化遺産—27『大阪府』人文社、1997年10月初版、86～140頁：前掲(8)の最新版。

このほかに現在、書店の店頭には、「JTBの

旅ノート」、「ブルーガイドパック」、「ブルーガイド日本」、「歩く地図」というガイドブックが並んでいるが、河内に含まれる地域についての記載はほとんどないので、取り上げなかった。

また「旅」「旅行読売」「るるぶ」などの旅行雑誌や一般誌の中にも、多くの旅行案内記事が載っているが、ここでは原則として、全国分が十数巻ないし数十巻のシリーズとして出ているガイドブックに限った。唯一の例外は、大阪府が出した(9)である。

全国が1冊に収められている(6)『旅程と費用』については、戦前・戦後のいくつかの版を検討した結果、戦前よりずっと詳しい戦後復刊の最初の分を選び、それが地方別に分かれて出た(7)最新旅行案内は、その初版を取り上げた。全国分がシリーズで出ているガイドブックのうち最も詳しい郷土資料事典(人文社)と新日本ガイド(日本交通公社)については、初版と最新版とを取り上げようと考えたが、残念ながら初版を見ることができず、前者については初版の4年後の第3版、後者についても4年後の改訂4版で代行させた。

以上のようにして(1)から(18)までの18点に絞ったわけであるが、我々が閲覧し得た限りにおいて<sup>10)</sup>、新旧ガイドブックの主要なものは、ほぼすべて取り上げることができたと考えている。そして(1)『河内名所図会』と(9)『道しるべ大阪』を除けば、全国のどの地域についても、同様の観点から検討するためのデータとして利用することができる。

### III. ガイドブックで取り上げられた「名所」

つぎに、これら18点のガイドブックで取り上げられた「名所」を一覧表にして示すと、表1の通りである。

この表には、(1)から(18)までの二つ以上で取り上げられているもののみを選び、一つだけにしか取り上げられていないものは割愛

表1 ガイドブックで取り上げられた「名所」

(1)から(18)までの二つ以上で取り上げられているもののみを選び、一つだけにしか取り上げられていないものは割愛した。ただし、(4)と(5)、(8)と(18)、(10)と(11)はそれぞれ同系統の出版物の旧版と新版なので、両者のみに取り上げられているものは一つと見なして割愛した。

◎は500字以上の詳しい解説、○は50字以上、500字未満の解説、△は50字未満の簡単な解説、

●は『河内名所図会』で版画が掲載されているもの、\*は不記載であることを示す。

- (a)は河内名所図会に掲載され、現在のガイドブック (13)―(18)にも掲載されているもの
- (b)は河内名所図会に掲載されているが、現在のガイドブック (13)―(18)には掲載されていないもの
- (c)は明治以後、第2次大戦までのガイドブック (2)―(4)に新たに掲載されたもの
- (d)は第2次大戦以後のガイドブック (5)―(18)に新たに掲載されたもの

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)
[I 枚方市]																		
(a)神社	①片笠神社 (交野神社)	●	○	*	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	*	*	*	○
(a)史跡	②伝王仁墓	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	*	*	*	*
(b)神社	③蹉陀神社	●	*	*	○	○	*	*	*	*	*	○	*	*	*	*	*	*
(b)仏閣	④光善寺	◎	○	*	*	*	*	*	*	*	*	○	*	*	*	*	*	*
(b)仏閣	⑤万年寺	●	○	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
(c)神社	⑥交野天神社	*	*	*	○	○	△	△	*	○	○	○	○	○	*	*	*	○
(c)古墳	⑦牧野車塚古墳 [史跡]	*	*	*	○	○	△	△	*	○	○	○	○	*	*	*	*	○
(d)史跡	⑧百済寺跡 [特別史跡]	*	*	*	*	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	*	*	*	○
(d)古墳	⑨禁野車塚古墳 [史跡]	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	△	*	*	*	*	*	○
(d)施設	⑩枚方パーク	*	*	*	*	*	△	○	*	○	*	○	*	*	*	*	*	○
(d)施設	⑪王仁公園	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*
(d)施設	⑫铸物民俗資料館	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	△	○	○	*	*	*	*

⑧百済寺跡は1952年、国の特別史跡に指定、1975年公園として整備、⑫铸物民俗資料館は、1979年枚方市が田中家の住宅と铸物工場の寄付を受け、移築して開設。

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)
[II 交野市]																		
(a)仏閣	①獅子窟寺	●	○	*	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	*	*	○
(a)神社	②磐船	●	○	*	*	○	*											
(a)神社	③磐船神社						○	○	◎	○	○	○	○	○	*	*	○	
(a)自然	④源氏の滝 (元寺滝)	○	*	△	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	*	*	*
(b)史跡	⑤渚院跡	○	○	*	*	*	*	*	*	○	*	*	○	*	*	*	*	*
(c)神社	⑥星田妙見宮	*	*	△	*	○	*	*	*	*	*	*	△	*	○	*	*	*
(d)建物	⑦山添家住宅 [重文]	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	△	*	○	*	*	*	○
(d)建物	⑧北田家住宅 [重文]	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	○	*	*	*	○
(d)施設	⑨大阪市大理学部付属植物園	*	*	*	*	*	*	○	○	○	○	*	○	○	*	*	*	○
(d)施設	⑩大阪府民の森くろんど園地	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	*	*	*

②磐船と③磐船神社とは、実質的には同じ内容のものを対象としている。⑨大阪市大理学部付属植物園は、1950年設置、1954年開園。

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)
[III 寝屋川市]																		
(a)其他	①茨田堤	○	*	*	*	*	*	*	◎	*	△	○	*	*	*	*	*	○
(d)古墳	②石宝殿古墳 [史跡]	*	*	*	*	○	*	*	*	○	○	○	*	*	*	*	*	○
(c)史跡	③高宮廃寺跡 [史跡]	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	○
(d)史跡	④秦河勝墓	*	*	*	*	*	*	*	*	○	*	*	○	*	*	*	*	○
(d)神社	⑤成田山不動尊	*	*	*	*	*	*	△	△	○	○	*	*	○	*	*	*	○
(d)建物	⑥菅相庵	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	○

⑤成田山不動尊は1934年成田の本山から分霊を勧請して創建、⑥菅相庵は1955年京都の芹生から移築。

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)
[IV 四条畷市]																		
(a)史跡	①小楠公墓所 (楠木正行墓)	◎	○	△	○	○	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	○
(a)史跡	②和田賢秀墓	○	○	△	○	○	*	*	*	*	*	*	△	*	*	*	*	○
(a)史跡	③室池	△	*	*	*	*	*	△	△	○	*	△	*	*	*	*	*	○
(c)神社	④四条畷神社	*	○	△	○	○	○	○	○	○	○	△	*	*	*	*	*	○
(c)史跡	⑤住吉神社の石風呂	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	*	*	*	*	*	○
(d)古墳	⑥忍岡古墳	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	△	*	*	*	*	*	○

④四条畷神社は1890年明治天皇の勅命により創建、⑥忍岡古墳は1934年発見。

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)
[V 大東市]																		
(a)仏閣	①慈眼寺 (野崎観音)	●	○	△	○	○	*	*	○	○	○	○	○	○	*	○	*	○
(a)史跡	②飯盛城跡 (飯盛山)	○	○	△	*	*	*	*	*	○	○	○	○	*	*	*	*	○

〔VI 門真市〕		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)
(d)自然	① 藁蓋のクス〔天然記念物〕	*	*	*	*	○	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	*	○
(d)自然	② 稗島のクス	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	△	*	*	*	*	*	*	○

〔VII 守口市〕		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)
(a)神社	① 佐太天神宮（佐太天満宮）	●	○	*	*	*	*	*	○	○	*	△	○	*	*	*	*	*	○
(a)仏閣	② 来迎寺	●	○	*	*	*	*	*	○	○	*	○	○	*	*	*	*	*	○
(a)其他	③ 文禄堤	○	*	*	*	*	*	*	◎	*	△	○	*	*	*	*	*	*	○
(c)仏閣	④ 光明寺	*	*	*	○	*	*	*	○	*	*	△	*	*	*	*	*	*	○

〔VIII 東大阪市〕		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)
(a)神社	① 枚岡神社	●	○	△	○	○	*	○	○	○	○	○	○	○	○	*	○	*	○
(a)神社	② 石切剣箭神社	●	○	△	*	*	*	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	*	○
(a)其他	③ 暗峠（棕ヶ嶺峠）	●	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○
(a)自然	④ 生駒山〔名勝〕	○	*	*	*	*	*	○	*	*	*	△	*	*	○	○	*	*	○
(a)仏閣	⑤ 往生院（六万寺）	○	○	*	*	*	*	*	*	○	○	○	○	*	*	*	*	*	○
(a)仏閣	⑥ 慈光寺	●	*	△	*	*	*	*	*	○	○	○	△	*	○	○	*	*	*
(a)仏閣	⑦ 興法寺	○	○	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	*	*	○	*	*	*
(b)神社	⑧ 若江鏡神社	●	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	*	*
(b)仏閣	⑨ 長栄寺	○	*	*	*	*	*	*	*	○	○	○	○	*	*	*	*	*	*
(c)神社	⑩ 瓢箪山稻荷神社	*	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	*	*	*	*	○	*	○
(c)施設	⑪ 枚岡公園	*	*	△	*	*	*	*	○	*	*	*	○	*	*	*	*	*	*
(c)施設	⑫ 枚岡梅林	*	*	*	○	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	*	*	*	*
(d)其他	⑬ 日下貝塚〔史跡〕	*	*	*	*	○	*	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	○
(d)建物	⑭ 鴻池新田会所〔重文〕	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	○	*	○	*	*	*	○
(d)古墳	⑮ 山畑古墳群	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
(d)古墳	⑯ 五条古墳	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	△	*	*	*	*	*	○
(d)施設	⑰ 市立郷土博物館	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	○	○	*	○	*	○
(d)施設	⑱ 大阪府民の森	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	○	*	○	○	*	○	*	*

⑬ 日下貝塚は1925年発掘、⑭ 鴻池新田会所は、1985年より解体修理、1997年一般公開。⑰ 市立郷土博物館は1972年開館。

〔IX 八尾市〕		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)
(a)仏閣	① 顕証寺（久宝寺御坊）	●	*	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	*	*	*	○
(a)仏閣	② 八尾別院大信寺（八尾御坊）	●	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	*	*	*	○
(a)仏閣	③ 常光寺（八尾地藏）	●	○	○	○	○	○	*	○	○	○	○	○	○	*	○	*	○	○
(a)仏閣	④ 大聖勝軍寺（下ノ太子）	◎	*	△	*	*	*	*	*	*	○	○	○	○	*	○	*	○	○
(a)神社	⑤ 玉祖神社	●	○	*	○	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○
(a)神社	⑥ 恩智神社	●	○	*	*	*	*	*	*	○	*	*	*	*	*	*	*	*	○
(b)古墳	⑦ 高安千塚	○	○	*	○	○	*	*	*	○	*	*	○	*	*	*	*	*	*
(b)史跡	⑧ 木村重成墓	○	*	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	*	*	*	*	*	*
(b)仏閣	⑨ 教興寺	●	○	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
(b)仏閣	⑩ 法藏寺	●	△	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
(b)其他	⑪ 十三峠	○	△	*	*	*	*	*	*	○	*	*	○	*	*	*	*	*	*
(c)仏閣	⑫ 神宮寺	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	○	*	*	*	*	*	*	○
(d)古墳	⑬ 心合寺山古墳〔史跡〕	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	△	*	*	*	*	*	○
(d)建物	⑭ 環山楼	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○
(d)史跡	⑮ 水呑地藏	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	△	*	*	○	*	*	*
(d)施設	⑯ 八尾空港	*	*	*	*	*	*	*	△	*	○	○	*	○	○	*	*	*	*
(d)施設	⑰ 八尾市立歴史民俗資料館	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	○	*	○	*	△
(d)施設	⑱ 久宝寺緑地	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*

〔X 柏原市〕		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)
(a)仏閣	① 安福寺	◎	○	*	○	○	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	*	○
(a)其他	② 大和川つけ替記念碑（築留）	●	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	○
(a)史跡	③ 智識寺跡	○	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	*	○
(a)仏閣	④ 瑠璃光寺	○	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	*	*	*	*	*	○
(c)施設	⑤ 玉手山遊園地	*	*	△	○	○	*	*	*	*	*	*	*	○	*	*	*	*	*
(c)古墳	⑥ 高井田横穴群〔史跡〕	*	*	*	*	*	*	○	○	○	○	○	*	*	*	*	*	*	○
(c)古墳	⑦ 松岳山（美山）古墳〔史跡〕	*	*	*	○	○	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	*	○
(d)古墳	⑧ 安福寺横穴群	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	*	*	*	*	*	*	○
(d)建物	⑨ 三田家住宅〔重文〕	*	*	*	*	*	*	*	*	*	○	○	*	*	*	*	*	*	○

⑥ 高井田横穴群は1917年発見。

した。また(4)と(5)，(8)と(18)，(10)と(11)は，それぞれ同系統の出版物の旧版と新版なので，両者のみに取り上げられているものは一つと見なして割愛してある。

表の中の二重丸，一重丸，三角，黒丸，アスタリスクについては，表の冒頭に説明した通りである。

また，各「名所」について，『河内名所図会』にすでに載っていたかどうか，載っていたものについては，現在も載っているかどうか，載っていなかったものについては，いつから載り始めたか，によって，やはり表の冒頭に示したように，(a)(b)(c)(d)の四つに分類し，各「名所」の冒頭に記号で示した。

さらに，各「名所」を上記のガイドブック(18)の索引などを参考にして，「自然」「神社」「仏閣」「史跡(古墳を除く)」「古墳」「建物」「施設」「其他」の八つの範疇に分類し，これもそれぞれの「名所」の冒頭に記してある。

これら(a)(b)(c)(d)および八つの範疇ごとにカウントした名所の数を，表にして示すと，表2の通りである。

表1および表2から指摘できる点を挙げて行こう。

まず，「自然」のうち，(a)に該当する二つは，通常，名勝・景勝というように表現されるII交野市の④源氏の滝，VIII東大阪市の④生駒山であるが，(d)に該当する二つは，VI門真市の2本のクスで，うち，薫蓋(クンガイ)のクスは1938年5月に天然記念物に指定されている。こうしたものが「名所」となるのは，比較的新しいことのように思える。

次に，「神社」と「仏閣」とは，『河内名所図会』にすでに掲載されていた(a)，(b)が，大部分を占めている。そうでないのは，(c)に該当するIV四條畷市の④四條畷神社(1890年明治天皇の勅命により創建された)と，(d)に該当するIII寝屋川市の⑤成田山不動尊(1934年創建)など，比較的少数である。これら新しいものについては『大阪府の歴史散

表2 (a)～(d)および八つの範疇別に見た「名所」の数

	(a)	(b)	(c)	(d)	計
自然	2	-	-	2	4
神社	7	2	4	1	14
仏閣	12	5	2	-	19
史跡	6	2	1	4	13
古墳	1	-	3	7	11
建物	-	-	-	6	6
施設	-	-	3	10	13
其他	4	1	-	1	6
計	32	10	13	31	86

(a)～(d)の分類については表1参照

歩』はごく簡単に述べるか，あるいは全く無視している。

「神社」・「仏閣」には，(b)つまり『河内名所図会』には載っているのに現在のガイドブックには掲載されていないものも少なくない。中には，I枚方市の⑤万年寺のように，すでに消滅しているものもある。また，I枚方市の③蹉陀神社<sup>11)</sup>や，IX八尾市の⑨教興寺などは，『河内名所図会』に版画まで載っており，また『歴史散歩』には記載されているが，(13)～(17)の一般的ガイドブックにはもとより，比較的詳しい(18)にも全く載っていない。実際に訪れてみると，一般観光客にとっての観光スポットといった性格は皆無の神社や寺であることがよく分かる。

次に「史跡」は，(a)，(b)，(c)，(d)のいずれもある。うちI枚方市の⑧百濟寺跡は，大阪府における僅か二つの「特別史跡」の一つ(もう一つは大阪城)であるが，注目されたのは第二次大戦後のことで，1952年，国の特別史跡に指定され，1975年，公園として整備され，戦後のほとんどすべてのガイドブックに取り上げられるようになっていく。

「古墳」は，北河内・中河内で『河内名所図会』に掲載されていたのは，IX八尾市の⑦高安千塚のみである。その他は(c)か(d)で，

現在国の「史跡」に指定されているものが多いが、今日のように、古墳が大小を問わず、「名所」となったのは、明治以降と考えてよい。中には1917年発見のX柏原市の⑥高井田横穴群、1934年発見のIV四條畷市の⑥忍岡古墳のように、発見の新しいものもある。

「建物」は六つすべて(d)である。II交野市の⑦山添家住宅、⑧北田家住宅、X柏原市の⑨三田家住宅(いずれも重文)のような民家がガイドブックに取り上げられるようになったのは比較的新しい。1997年から公開されたVIII東大阪市の⑭鴻池新田会所(やはり重文)も同様である。

「施設」としたのは、公園、遊園地、博物館などで、やはり、いずれも新しい。一部は戦前からあったが、大部分は戦後設立されたものである。

「其他」のうち、(d)に該当するのは1925年発掘のVIII東大阪市の⑬日下貝塚(史跡)であるが、それを除く五つはすべて『河内名所図会』にも掲載されている。III寝屋川市の①茨田堤、VII守口市の③文禄堤、VIII東大阪市の③暗峠、IX八尾市の⑪十三峠、X柏原市の②築留、がそれである。

#### IV. ガイドブックにおける「名所」の記述内容

次に、新旧ガイドブックにどのように記載されているかを検討するために、なるべく原文に近い形で、北河内の野崎観音、四條畷神社の二つについての記述内容を例示した。30頁以降に掲げた“ガイドブックにおける河内の主な「名所」の記述”がそれである。

まず(A)は、V大東市の①慈眼寺、通称野崎観音についてである。

その(1)は1801年に出た『河内名所図会』の記載内容であり、旧漢字・旧仮名使い、さらに旧仮名使いによるルビを、もとのまま示してある(ただし原文は縦書き)。

記載内容は由緒、故事来歴が主で、10行目

の一条院は平安時代であり、「そののち亀山のみかど」は鎌倉時代、その「弘長元年」は1261年であるし、下から4行目の永禄8年は1565年、室町時代である。『河内名所図会』が書かれた1800年頃の状況を述べてあるのは最後の3行、野崎参りの描写だけである。また野崎参りが舞台となる近松門左衛門の浄瑠璃『女殺油地獄』は享保6年(1721年)、またお染・久松を扱った近松半二の浄瑠璃『新版歌祭文』は安永9年(1780)に、ともに大坂で上演されているが、それらについての言及はない。

それに対し(2)『新撰名勝地誌』は、5月1日より10日間は参詣客が多く、「関西鉄道は為に臨時汽車を発し、仮停車場を設くるに至る」といった、この本が書かれた頃の状況をヴィヴィッドに描こうと努めている。ただし最後の「野崎病院は野崎観音の南隣山腹にあり」というくだりは、野崎観音と全然関係がない。多分、この項目の執筆担当者が、本当にそこへ行って書いたのだ、ということをお願いたくて、書いたのであろう。

(4)『日本案内記』初版(1933年)の記述は比較的小さいが、お染久松の墓があるということは、ここで初めて出てくる。これと1950年の戦後改訂版とを比べると、ほぼ同じことが書かれているが、表現に微妙な違いがあり、古い語彙は改められていて、例えば「<sup>さいかく</sup>賽客」といった言葉は、戦後改訂版では使われていない。

(12)の『大阪府の歴史散歩』の記述は、たいへん行き届いていて、我々にとっては最も納得できる。例えば本文2行目「1708(宝永5)年鑄造の銘によると」というように、典拠を明らかにして寺の由緒を述べる、といった叙述方法がそうである。見るべき何かがあるかを要領よく示し、上記二つの浄瑠璃についても言及し、また「東高野街道」「大阪平野の眺め」にも触れている。

そして(13)の「エアリアガイド」、(14)の「旅王国」、(16)の「私の日本」は、いずれも、こ

## ガイドブックにおける河内の主な「名所」の記述

### (A) 野崎観音

#### (1) 1801 河内名所圖會 卷之六 讚良郡

福聚山慈眼寺 (野崎村にあり。禪宗、曹洞)

本尊十一面観音(唐作。長三尺五寸。また、三十三所観音像・江口君の像、ともに本堂に安ず) 薬師堂(本堂の南にあり)阿彌陀堂(薬師堂の傍にあり)羅漢堂(十六羅漢・四天王を安ず)鐘堂(鎮守の傍にあり)

寺説に云く、

それ當山は、南天竺波羅奈國大悲の聖蹟を模して、古刹たる事年既に深し。今に至って、寺前の澤を、人呼んで波羅奈澤といふ。惜しいかな、中古以來、傳記喪びて、ただ郷童の口碑を證とす。ゆゑに開闢の年代・事實、詳らかならず。大悲尊像も何人の刻めるか。寺宇の権輿も分明ならず。そもそも一條院の御宇に、攝州難波江の渡口に住して、ゆききの旅客を饗す美女あり。世にこれを江口君といふ。ある時、沈痾に罹りて、医療の驗さらになし。常に聞けるは、和州初瀬寺の觀世音、靈應殊に勝れさせたまふ。既にかの地に參籠して懇に禱り、一七日満願の時靈夢を感ず。端嚴たる高僧來りて曰く、河州野崎福聚山は我が山に異ならず。そこの大悲に懇求せば、所願空しからず。姣女、夢覺めて歡喜し、直ちに尋ねてこの山に來り、本尊を敬禮、七晝夜に満ちぬればたちまち病惱治癒す。これより傳へ聞いて、四來の緇素、遠村・近郷ここに群す。また、野崎を去る事二里ばかりにして、御供田と名づくるものは、當寺の設に宛ぬるなり。そののち龜山帝の朝に、權大僧都實慶當山に寺職して、弘長元年に寺記を書けり。また、伏見院の御時、沙門入蓮ここに住して衰弊をかなしみ、力を優婆塞秦氏に勸せて重修せらる。この時に立つる石塔婆、今に在す。またその後、永祿八年、松永久秀志實城に籠りて近隣動亂の時、佛閣、兵燹に罹りて灰燼となる。やうやく本尊、實慶の寺記のみ遺れり。それより今のごとく再營あり、春は無縁經とて櫻花匂ふ頃、秋は紅葉して山々錦なるふし、浪花津の老少ここに群じ、あるは川舟に棹をさして、道ゆく人と言葉戦ひして詣する輩多し。これを野崎參と云ふ。

#### (2) 1915 新撰名勝地誌 卷之一畿内 河内國 北河内地方

野崎観音 四條畷驛より東南十町、野崎山の中腹、眺望絶佳なる所にあり。慈眼寺と號す。本尊十一面観音は靈驗顯著なりとて、歸依信仰するもの多く、大阪府有数の流行佛なり。毎年五月一日より十日間は無縁經修行中とて、賽者雲の如く、附近到る所掛茶屋を設けて休憩に便じ、關西鐵道は爲めに臨時汽車を發し、仮停車場を設くるに至る。時は恰も春季菜花の候に際して、一層の風趣を添ふ。また七月九日十日は千日詣とて、參詣者多く、毎月の縁日は十七、十八日の兩日なり。なほ本堂の裏に江口の君を安ずる一堂あり、結縁の神なりとす。野崎病院は野崎観音の南隣山腹にあり。

(4) 1933 日本案内記 近畿篇 下 案内編 大阪近郊 三、北河内地方

【野崎観音】 片町線野崎驛の東半軒、四條村大字野崎にあり。曹洞宗で、開基、創建年代は不明。本尊十一面観音は世の尊信が厚く、五月一日から十日間無縁經修行の時は野崎詣と云って、賽客が最も多い。境内に三十三ヶ所観音堂、江口の君塚、お染久松の墓等がある。

(12) 1990 大阪府の歴史散歩 下 北河内 4 生駒山麓を片町線に沿って

野崎観音 ▼大東市野崎2-7-1 <→ p.4,30>

▼JR片町線野崎駅下車8分。

野崎駅から東へ約700m、東高野街道を横切り飯盛山のすそにとりついた所に野崎の観音さんとしてよく知られる福寿山慈眼寺(曹洞宗)がある。1708(宝永5)年鑄造の銘によると、奈良後期に行基が自ら観音像を刻み安置したのが寺の開創である。のち一条天皇の頃(986~1011)、摂津国江口の里の長者がその病を長谷観音に祈願して治ったので、報恩のため寺地を現在地に移し再興したという。戦国末期兵火により焼失し、慶長・元和年間(1596~1624)、僧青巖が三たび寺を興した。歴代の住持は観音信仰をひろめ堂宇を整えた。こうして近世には、近松門左衛門の浄瑠璃『女殺油地獄』に乗合船の「鱸に舳を漕ぎ付けてよそも一つの舟のうち」とあるように、参詣者で大いににぎわった。

境内には、1689(元禄2)年に大阪の豪商平野屋五兵衛が寄進した本堂や薬師堂などが建ち、近松半二の浄瑠璃『新版歌祭文』でおなじみのお染め久松の塚もある。本尊の十一面観音は白檀の一本彫、高さ約1.1mの平安前期の作である。子授けや安産に効験があるとして信仰を集めている。春の「無縁經」は5月1日から10日までで、8日は俗に「ようかび」といい、特ににぎわいをみせる。鐘楼より上の野崎観音公園からは大阪平野のながめがよく、少し上ると林の中に1294(永仁2)年建造の九重石塔が残っている。

(13) 1997 エアリアガイド/30大阪 東大阪・生駒 みどころ

野崎観音 地図170 B-2

「野崎まわりは屋形船でまいろ」。標高318mの飯森山の麓、「野崎の観音さん」は正式名を慈眼寺といい、行基が観音像を刻んで安置したのが始まりと伝える。本尊の十一面観音像は安産や子授けに靈験あらたかという。大阪の豪商平野屋五兵衛が寄進した本堂や薬師堂、お染め久松の墓もある。寺の背後は公園で、大阪平野の眺めもよい。京橋駅からJR片町線で15分、野崎駅下車、徒歩8分。拝観自由

## (B) 四条畷神社

(2) 1915 新撰名勝地誌 巻之一畿内 河内國 北河内地方

四条畷神社 四条畷驛より東方五町、飯盛山の西腹にあり。楠正行及び弟正時の靈を祀れるもの即ちこれなり。社地は、正行が決死吉野を出で、敵の大軍と奮戦したところ、四條村大字北條に、今猶の遺路を存せり。神社は明治二十二年の創建にかゝり、別格官幣社に屬せり。境内はめぐらすに美しき石垣を以てし、之に倚りて繪馬堂あり。華表より本社まで五町、兩側に楓樹を植

え、境内の清洒なる、堂宇の壯麗なる、賽客をして自ら襟を正さしむ。殊に、社域眺望に富み、晴天の日には遠く播丹の語翠微を目睫の間に集むるを得べし。例年四月三日より五日まで春季大祭ありて雑沓を極む。小楠公の墓は本社を去る西九町、田畝の間にあり。巍然たる大石碑には刻するに、贈従三位楠朝臣の九字を以てし、傍側に立てる老楠樹は、蒼翠天を蔽ひ、うたゝ楠氏の功業を追想せしむ。又、社の華表より北三町計り、高野街道の傍らに和田賢秀の墓あり。和田氏は楠氏の一族にして、正行と共に此所に戦没せしなり。

(4) 1933 日本案内記 近畿篇 下 案内編 大阪近郊 三、北河内地方

【四條畷神社〔別格官幣社〕(二圖さ3) 同四條畷驛の東約一軒、四條畷村南野にある。小楠公社と呼び、明治二十二年の創建で、楠木正行を祀る。正行は正平三年弟正時と共に、高師直の軍とこの地に戦ひ、歳二十三を以て没した。社は飯盛山の西腹にあり、その山麓を南北に走る東高野街道は京都、高野、吉野方面に通ずる要路で、當年の戦蹟たるを想はしめる。社寶の薙刀直し刀は明治天皇の御寄付にかゝり、備中長船住長守作正平八年正月日の銘があり、包永在銘の太刀一口と共に國寶である。境内櫻樹多く、樹木蒼然として繁り、社殿を圍んで居る。境内の攝社御妣神社は大楠公夫人を祭神として居る。例祭は二月十二日、御妣神社は十月五日である。飯盛山の山上に三好氏の城址あり、遊園地になって居る。

(6) 1952 旅程と費用 河内・和泉地方

四條畷神社 大阪府北河内郡四條畷町南野、片町線四條畷駅の東約一軒  
京阪電鉄京阪線香里園駅からバスもある。

祭神は楠木正行・楠木正時・和田賢秀等。例祭 二月十二日。

〔重文〕薙刀直し刀(銘長守)・太刀(銘包永)。

明治廿二年(一八八九年)の創建、頂上が遊園地になっている飯盛山西腹眺望に富む地にある。祭神は吉野朝のため附近の地で戦没した。境内に大楠公夫人を祀る御妣(ミオヤ)神社(例祭十月五日)がある。また正行の墓は四條畷駅の西約三〇〇米に、賢秀の墓は同駅の北約半軒にある。

(12) 1990 大阪府の歴史散歩 下 北河内 4 生駒山麓を片町線に沿って

伝楠木正行墓 ▼四條畷市雁屋南町 <→地>p.4,30

▼JR片町線四條畷駅下車4分。

四條畷駅北側の商店街を西へ行くと、正面に伝楠木正行墓(府史跡)がある。

(中 略)

墓から駅のほうへ戻り、まっすぐ飯盛山の麓まで行くと四條畷神社に着く。1890(明治23)年、正行以下の死者を祀るため創建された。社宝として銘包永の太刀(国重文)がある。神社の南のあたりを石木戸といい、飯盛城の門口であったと考えられ、今も登山口となっている。

なお、参道を約600m戻った東高野街道との交差点の北約350mの所に、正行とともに死んだ従兄弟の伝和田賢秀墓(府史跡)がある。地元では「齒神さん」として親しまれてきた。

の『歴史散歩』を何よりの参考にして書いているようで、そこからいくつかの情報を引き出して、

それを手短かにまとめている。ただし『歴史散歩』に記載がなくて、この三つがともに掲げているのは、昭和10年(1935年)に東海林太郎が歌ってヒットした『野崎小唄』の「野崎参りは屋形船でまいろ」という歌詞である。

『歴史散歩』がこれに触れないのは一つの見識であろうが、しかし昭和10年も一つの歴史であり、この歌詞を掲げ、さらにその先「どこを向いても菜の花ざかり」まで記して、北河内は江戸時代から明治まで、全国有数の菜種作地帯であった、ということを指摘してほしかったと思うが、これは無理な注文であろうか。

ここでは(13)の「エリアガイド」だけを例示しておく。他の2点も記述内容は大同小異であるが、表現は少しずつ違っている。

つぎに(B)は、IV四條畷市の④四條畷神社についてである。

前述のように明治天皇の勅命で創建された別格官幣社であるから、『河内名所図会』には記載がない。

(2)『新撰名勝地誌』には、詳しく記述され、そしてさまざまの言葉を連ねて“忠臣”楠木正行(小楠公)の行動を賛美している。

この点は(4)『日本案内記』も同様であるが、ここに掲げた1933年版と戦後改訂版を比べると、記述の微妙な違いが見られる。例えば境内の摂社みおや神社の祭神を、戦前版では敬意を表して「大楠公夫人」としているが、戦後版では「楠木正成夫人」と改めている。

(6)の『旅程と費用』も戦後1952年なので、賛美の姿勢は見られない。

明治になってできた歴史の浅い神社であるから、(12)『歴史散歩』では、四條畷神社を独立の項目とはせず、「伝楠木正行墓」という項目の中に、わずかに2行述べているだけである。

そのためか、この『歴史散歩』に準拠する点が多い(13)～(17)のガイドブックでは、この神社のことを、全く取り上げていない。

このほか、個々の「名所」について、新旧ガイドブックのそれぞれの記述内容を比較・検討していくと、多くの興味深い点を指摘できる。例えば、

①時期が下るほど、文章表現が易しくなり、付近の眺望やそこからの眺望にも言及されるようになってきていること、

②また、地図や写真が掲げられ、ことに現在書店の店頭に並んでいる(13)～(17)では、それらがすべてカラーであること、

③そこを訪れるための交通機関や参拝・拝観・見学の可能な時間、電話番号など、観光客にとって有用な情報がより詳しく呈示されるようになってきていること、

④しかし、ヨーロッパの代表的ガイドブックと異なり、観光客が公共交通機関を利用して訪れることを前提に記述され、自動車での訪れかたや駐車場などについての記述がほとんどないこと、

⑤新しいガイドブックでは「名所」についての直接の記述のほか、飲食店、土産物についての記述が増えていること、などである。

さらに、とくに指摘しておきたいのは、上記の「名所」の八つの範疇のうちの「其他」についてである。

上記のように、「其他」とした六つのうち、日下貝塚を除く五つ(茨田堤、文祿堤、暗峠、十三峠、築留)は、いずれも『河内名所図会』にすでに載っている。

『河内名所図会』といった名所図会の類は、神社・仏閣・史跡・名勝といった、古いタイプの名所の故事来歴や関連する和歌など、古い由緒に関わる事項が主として掲載されていると考えられがちであり、現に野崎観音の記述はそうであるが、しかし、堤防や峠、また宝永元年大和川付け替えのときの築留なども載っており、これは大いに注目すべきことで

あろう。明治以降のガイドブックには記載がないので、表1には挙げていないが、このほか『河内名所図会』には、奈良街道、八尾の市、高安木綿など、『河内名所図会』が刊行された時点で活発に機能していた（したがって高い「日常性」を有していた）と考えられるものが、いずれも版面入りで解説されている。暗峠、十三峠、奈良街道、高安木綿などが、なぜ「名所」であり得たのか、考えてみると不思議である。

実を言うと、今回『河内名所図会』に手をつけたのは、検討の最後の段階になってからであった。明治の『新撰名勝地誌』以降について表1の一覧表を作ってから、『河内名所図会』の欄を付け加えたのである。したがって、『河内名所図会』に関する検討は不十分であり、もしも『河内名所図会』から出発していたならば、もっと違った展望を開き得たかも知れないと思う。

今後は、今回割愛した南河内の部分も取り上げると同時に、『河内名所図会』についてその記載内容に関する検討を深め、また、その120年余り前、延宝7年(1679)に出た三田浄久『河内鑑名所記』なども併せ取り上げて、検討を進めて行きたいと考えている。

(浮田：神戸学院大学人文学部、伏見：関西大学・院)

〔付記〕

本稿の骨子は、歴史地理学会第41回(平成10年度)大会で発表した。

〔注〕

- 1) 浮田典良・香川貴志・古賀慎二・藤田武弘・松井順太郎「日本における宿泊施設(旅館・ホテル等)の分布とその変化」,立命館文学502,1987,24~55頁。
- 2) 竹内啓一「ガイドブックにおける日本像」,地域1号,1979。竹内啓一『とぼろうぐー地理学雑誌帖一』,古今書院,1993,223~240頁に所収。
- 3) 竹内啓一「旅行案内書,旅行記のことなど」,イタリア図書35号,1965。竹内啓一『とぼろうぐー地理学雑誌帖一』古今書院,1993,204~215頁に所収。
- 4) 竹内啓一「旅行案内書,旅行記のことなど,再考」,イタリア図書 Nuova Serie 1号,1988。竹内啓一『とぼろうぐー地理学雑誌帖一』,古今書院,1993,216~222頁に所収。
- 5) 中川浩一『旅の文化誌ーガイドブックと時刻表と旅行者たちー』,伝統と現代社,1979,278頁。
- 6) 滝波章弘「ギドブルーにみるパリのツーリズム空間記述ー雰囲気とモニュメントの対比ー」,地理学評論68A-3,1995,145~167頁。
- 7) 西村孝彦「観光空間の生産についてーギド・ブルーの検討を中心にー」『文明と景観』,地人書房,1997,221~271頁。
- 8) 加賀美雅弘『ハプスブルク帝国を旅する』(講談社現代新書),講談社,1997,286頁。
- 9) 所載頁は、北河内・中河内の部分だけでなく南河内を含めた河内の記載すべての所載頁を示してある。
- 10) 書店の店頭で求めた(13)~(17)以外は、大阪府立図書館,関西大学図書館,京都大学図書館,関西学院大学図書館にあるものを利用した。
- 11) 蹉陀神社の「陀」は本来足偏であるが、ここでは「陀」と表記しておく(表1でも)。